

# エラの破壊性とその原因： ユージン・オニールの『すべて神の子には翼がある』について

Ella's destructiveness and its causes:  
O'Neill's *All God's Chillun Got Wings*

田村 朋子  
Tomoko TAMURA

## はじめに

オニール (Eugene O'Neill, 1888-1953) の作品の中には、女性を主人公とする作品は数少ないが、代表的なものに『奇妙な幕間狂言』(*Strange Interlude*) (1928) と『喪服の似合うエレクトラ』(*Mourning Becomes Electra*) (1931) が上げられる。これらの作品の女性たちは同時に非常に特徴ある女性たちでありノーマルな女性とは言えない。今回取り上げる『すべて神の子には翼がある』(*All God's Chillun Got Wings*) (1924) の主人公エラ (Ella Harris) もまた同様である。ノーマルな女性とは、オニールの世界ではあくまでマイナーな女性たちでしか有りえないのである。

オニールが好んで作品に登場させる女性たちは、オニールの母エラ・オニール (Ella O'Neill) からの影響が多にある。Virginia Floyd は、母エラの特徴を作品の中の女性たちに投影されていると述べ、次のような分析をしている。"Some of Ella O'Neill's traits had been given to other wives and mothers in the past: neuroticism and detached, near madness (Nina Leeds, Deborah Harford), ruthless destructiveness (Christine Mannon, Ella Harris), long-suffering endurance

(Nora Melody, Eben Cabot's deceased mother)" (Floyd 534). Floyd が言及する「冷酷な破壊性」(ruthless destructiveness) として取り上げられているエラについて検証していく。エラは夫ジム (Jim Harris) を精神的に肉体的に残酷にも破壊し、最後は二人で死へと旅立つことになる。しかし、エラを単なる非情な、また残酷な破壊性を持った女性であると片付けてよいものだろうか。彼女もまた犠牲者ではないのか。エラの破壊性はどのようなものなのか。原因はどこにあるのかを考察してみる。

## 1

エラの破壊性を導くことになるのは、この作品でしばしば論じられている白人であるエラと黒人であるジムの異人種間の結婚にある。上演された当時のアメリカ社会では、第二の Ku Klux Klan が組織され、極端な人種差別がなされていた。KKK の活動は盛大で、当時は会員500万人とも言われ、悪い意味での人種差別が最高潮に達した時期でもある。オニール自身が上演を取りやめるように脅迫を受けている。<sup>1)</sup> 異人種間の結婚という題材だけでなく、舞台上で黒人が大胆にも白人

の女性の手にキスをするという行為が、非難される大きな原因となった。しかしオニールは、この異人種間の結婚を問題にしたのではなく、この異人種間の結婚はオニールにとっては劇作上の単なる手段でしかない。白人と黒人との結婚は、当時は言うまでもなく、社会的に、また白人社会だけでなく黒人社会からも、大きな問題とされる出来事である。ジムの母の言葉、"De white and de black shouldn't mix dat close. Dere's on road where de white goes on alone; dere's anudder road where de black goes on alone-" (298)<sup>2)</sup>からも容易に想像できる。その異人種間の結婚によって生じた夫婦間の苦しみや葛藤をオニールは描きたかった。異人種間の結婚でなくても、夫婦の間には、しばしば起こる得る問題である。オニールはその人種問題という枠を越えた人間の苦しみとしてこの作品を書いた。白人と黒人の結婚は、あくまで劇作上の手段であり、異人種間の結婚を夫婦間の葛藤の要因として主人公エラとその夫ジムの苦しみを描いたのである。T.S.Eliotは次のように指摘する。

But Mr.O'Neill has got hold of a "strong plot"; he not only understands one aspect of the "negro problem,"but he succeeds in giving this problem universality, in implying a wider application. In *this* respect, he is more successful than the author of *Othello*, in implying something more universal than the problem of race - in implying,

1) Virginia Floyd, *The Plays of Eugene O'Neill: A New Assessment* (New York: Frederic Unger Publishing, 1985.) を参考。

2) テキストは、*All God's Chillun Got Wings, in ed., Complete Plays 1920-1931* (New York: Literary Classics of the United States, 1988.) を使用した。引用はすべてこの版による。

in fact, the universal problem of differences which create a mixture of admiration, love, and contempt, with the consequent tension. (Eliot,169)

Eliot が指摘しているように、主体は単なる黒人問題ではなく、夫婦になったがゆえに誰にでも起こり得る、人間として常に抱える問題であり、特別な問題でもない。また「黒人であるために追い込まれる特殊な心理状態を主題とした劇であることは否定できないが、『地平線の彼方』『離れえぬ縁』などオニールが追求してきた男と女の関係、結婚と男の仕事の問題の延長線上のある作品だともいえる」(田川 99)と田川弘雄が述べているように、ジムが黒人であるという特殊な状況ではあるが、夫婦になった二人の問題、つまり男と女の関係を問題に二人の苦しみ、葛藤を描いたのである。ジムとエラはそれを乗り越えることはできない。エラは、夫ジムの、精神的にまた肉体的にも破滅させていく。

次に、エラの破壊性とともにもジムの破滅させていくその苦しみとは何か、その葛藤とは何かを検証していく。

## 2

第一幕、一場では、黒人街のはずれで少年4人に少女4人、それぞれ白人2人と黒人2人ずつ、みんなでおはじきをして遊んでいる。黒人のジムが勝ち、白人のミッキー (Mickey)、ショーティ (Shorty) は黒人のジムに負け、次回挑戦を申し出るが、お互い何の偏見もなく遊んでいる。"Jim Crow" (280) "you Chocolate" (280) という差別ことばが飛び交うが、みんな悪意なく肌の白いこと黒いことを無邪気にからかい、気に留めることなく遊ぶ。まだ、彼らは差別という偏見を持った社会の毒に冒されてはいないし、優越感や劣

等感もない。しかし白人のエラに好意を寄せるジムは、肌の色の違いを意識し始めているが、純真な子供心の悩みである。白くなりたいジムはエラに、一日三回、一杯の白墨と水を飲んで白くなるのだと告白する。そんな二人の会話が続く。

JIM – (*suddenly*) You know what, Ella? Since I been tuckin' yo' books to school and back, I been drinkin' lots o' chalk 'n' water tree times a day. Dat Tom, de barber, he tole me dat make me white, if I drink enough. (*pleadingly*) Does I look whiter?

ELLA – (*comfortingly*) Yes – maybe – a little bit – (281)

「前より白くなったかい」の問いかけに、「ほんのちょっと」というジムを慰めるための、優しい嘘をつけるエラがいる。しかし、二人は各々の世界で、つまりエラは白人社会という黒人社会とは隔離された社会で成長していく。9年の時が過ぎた今、以前のように優しい嘘をつけるエラはいない。エラは、他の白人同様、黒人への差別意識を成長させていく。潜在的に存在はしていたであろうが、幼い頃には、問題はなかった。しかし、今は、はっきりと意識する。自分は白人であって黒人ではない。そんなエラにジムは、"If you ever need a friend – a true friend –" (287) と申し出るが、エラからは冷たい言葉が返る。"I've got lots of friends among my own – kind, I can tell you" (287). ジムもまた、以前のように、エラと話すことはできない。かつての遊び仲間であるミッキーに対しても同じである。

MICKEY – Say, cut de comedy!

(*beginning to feel insulted*) Listen, you Jim Crow! Ain't you wise I could give yuh one poke dat'd knock yuh into next week?

JIM – I'm only asking you to act square, Mickey.

MICKEY – What's it to yuh? Why, yuh lousy goat, she wouldn't spit on yuh even! She hates de sight of a coon.

JIM – (*in agony*) I-I know – but once she didn't mind – we were kids together –

MICKEY – Aw, ferget dat! Dis is now!

JIM – And I'm still her friend always – even if she don't like colored people – (285-286)

幼い頃、からかう友に対し堂々と立ち向かって行ったジムは、もはやいない。ジムもまた黒人社会の中で育ち、好むと好まざるとにかかわらず自然に、いや意識的に、黒人であることをまた白人への劣等感を植え付けられ、おどおどした自信のない少年へと変化していく。敢えて意識はしたくない。しかし社会は許してくれない。そんな社会にジムは次第に押しつぶされていく。この問題は、人種問題を越えたジムの弱さであり、人間の弱さでもある。白人の女性と黒人の男性を、裕福な高度な教育を受けた女性と貧しく教育を受けることができなかった男性との結婚に、置き換えても良い。あるいは、オニールの両親のように、父親に甘やかされ何不自由なく育った若い女性と、年の離れた貧しくお金にこだわるけちな男性との結婚に、置き換えても良い。当然、二人の間には相容れないものが発生し、互いに苦しみ、葛藤が起きる。お互いに愛したがゆえの二人で解決しなくてはいけない問題である。

上演5年前の1919年の夏を頂点に、各地で大規模な人種暴動が起こり、社会的にも大きな問題となっていた。こうした「社会にはびこる病」(the prevailing sickness) (Floyd 259) を持ったアメリカ社会へ、オニールは一つのメッセージを発していることは否定できない。同じ黒人であるジョー (Joe) は、そんな社会の偏見に不満を抱きながらも、その不満を社会にぶつけることもできず、甘んじてそれを受け入れ、白人と共によく付き合っていく術を身に付ける。一方ジムは、ジョーとは反対に、表面的な形だけの、白人と同じような生活を望み、敢えて白人社会に入ろうとする。白人の仕事に就くことは黒人の夢であり成功の証である。仲間であるそんなジムに黒人としての戒めをジョーは語る。

JOE—No, you isn't! I ain't no fren o' yourn! I don't even know who you is! What's all dis schoolin' you doin'? What's all dis dressin' up and graduatin' an' sayin' you gwine study be a lawyer? What's all dis fakin' an' pretendin' and swellin' out grand an' talkin' soft and perlite? What's all dis denyin' you's a nigger — an' wid de white boys listenin' to you say it! Is you aimin' to buy white wid yo' ol' man's dough like Mickey say? What is you? (*in a rage at the other's silence*) You don't talk? Den I takes it out o' yo' hide! (*He grabs Jim by the throat with one hand and draws the other fist back.*) Tell me befo' I wrecks yo' face in! Is you a nigger or isn't you? (*shaking him*) Is you a nigger, Nigger? Nigger, is you a nigger?

JIM—(*looking into his eyes — qui-*

*etly*) Yes. I'm a nigger. We're both niggers.... (288)

「お前は親父の金で白人になるつもりか」この瞬間ジムは地獄に突き落とされる。白人の真似をしようとするジムへの戒めであり、同じ黒人仲間であるからこそその同情を込めた言葉でもある。"I'm nigger. We're both niggers" (288). ジムの悲しみと苦しみのこもった言葉であり、改めて黒人であることを認識させられる。黒人であるという劣等感から、緊張し、幾度となく試験に失敗する。しかし、弁護士になる夢は捨て切れず、その夢を追い続ける。

ELLA—After all, what's being a lawyer?

JIM—A lot—to me—what it means. (*in-tensely*) Why, if I was a Member of the Bar right now, Ella, I believe I'd almost have the courage to—

ELLA—What?

JIM — Nothing. (*after a pause-gropingly*) I can't explain—... (292)

JIM—I need it more than anyone ever needed anything. I need it to live.

ELLA—What'll it prove?

JIM—Nothing at all much—but everything to me. (293)

エラの「弁護士になればどうだっていうの？ どうするの？ どれだけ役に立っていうの？」の問いかけにジムは、「大したことはない——でもぼくにとってはすべてなんだ」というジムの言葉は劣等感の表れであり、法曹界の一員になることは、その劣等感や弱さの裏返しである。田川はこう述べている。

ジムが白人の仕事である弁護士をこころざしたのは、エラのアートを愛したかったからだろうか、または、黒人という劣等感の立場から解放されたかったためだろうか。前者はフロイトのいう性エネルギーに動かされての行為であり、後者に解釈すればアドラー (Alfred Adler) の権力欲 (will to power) が動機ということになる。白人女性を妻にし、白人の仕事に就くことは、経済的に一定の成功を収めた黒人の夢である。ジムを駆り立てたのは、一種の権力欲であった。(田川 99)

田川の指摘するように「黒人という劣等感の立場からの解放」とは、つまり「権力欲」であろう。そして白人であるエラとの結婚によってさらにその権力欲は強くなる。また一方でエラを愛するがゆえにエラのためにも弁護士への道を諦めきれない。自分とエラのために弁護士への意欲を燃やす。ジムはエラとの夫婦間の葛藤以前に白人への劣等感に打ち勝つことのできないジムの苦しみがある。

### 3

エラは幼なじみの白人ミッキーに捨てられ、ミッキーとの子供も亡くし、家族からも見捨てられ、今や頼る人は、今も変わらず優しく愛を注いでくれるジムしかない。ジムはついにエラのアートを愛する。しかし、黒人であるジムを受け入れることは出来ない。エラはジムが黒人であることを否定するかのようになり、ジムの心の白さを自分に言い聞かせる。このエラの尋常ではない白へのこだわりが、ジムの白への劣等感をさらに募らせ、いっそう精神的に追い込んでいく。その白へのこだわりが、エラの言葉の端々に出てくる。

ELLA—The only white man in the world! Kind and white. You're all

black-black to the heart. (291)

ELLA—You've been white to me, Jim. (*She takes his hand.*)

JIM—White - to you!

ELLA—Yes.

JIM—All love is white. I've always loved you. (*this with the deepest humility*) (293)

ジムは黒人である。黒人と結婚したためにエラもまた苦しみが始まる。ジムを夫としてではなく、友達、兄妹のような関係であった時は楽しく幸せに暮らせたが、男女の関係、つまり真実夫婦となってからは、エラのアートが恐怖が始まる。それはエラにとってもはや自分自身は白人ではなく黒人として生きていくことである。社会の自分に向けられる視線への異常なまでの恐怖。その恐怖は、エラの内なる心の現れであり、黒人への嫌悪である。"I want you to show 'em—all the dirty sneaking, gossiping liars that talk behind our backs—what a man I married. I want the whole world to know you're the whitest of the white!" (304) ジムは白人ではないが白人であるあなたたちよりずっと心は白いのよ。白なのよ。というエラのアートの叫びが聞こえてくる。しかし、裏を返せばこの言葉は、ジムが黒人であること、すなわち彼のアイデンティティをも否定しかねない。

自分の体の中にも黒人の血が流れ、黒い肌になるかのように恐れる。さらに、「黒い子が生まれるから子供を生みたくない」と黒への嫌悪感をあらわにする。『偉大な神ブラウン』(*The Great God Brown*) (1926) のマーガレット (Margaret) 同様、エラは真実の夫を認めることはできない。<sup>3)</sup> これ程までにエラのアートへの嫌悪、憎しみを知らず、ジ

ムは真実に直面することができず、エラの言動を肯定してしまう。白人と対等に生きていくためには、またエラに認めてもらうためには、弁護士になる他に方法はないと錯覚する。しかし、黒人であることは否定できない。そんな葛藤からジムは白人への劣等感を募らせ、よい結果を出せず悪循環となる。エラの苦しみを理解しているだけに、ジムもまた苦しみ、精神的に追い詰められていく。やがてエラと同じように、エラの進行に合わせ、ジムもまた精神的病に冒されていく。

しかし、そんなエラもジムなしでは生きられない。アメリカへ戻ったエラは、ジムの母と姉に出迎えられるが、ジムの姿が見えないと何かに取り付かれたかのような恐怖を抱く。

JIM - (*noticing this - warningly*)  
Remember Ella's been sick! (*losing control - threateningly*) You be nice to her, you hear! (*Mrs. Harris enters, showing Ella the way. The colored woman is plainly worried and perplexed. Ella is pale, with a strange, haunted expression in her eyes. She runs to Jim as to a refuge, clutching his hands in both of hers, looking from Mrs. Harris to Hattie with a frightened defiance.*)

MRS. H. - Dere he is, child, big's life! She was afraid we'd done kidnapped you away, Jim. (301)

エラにとってジムはすべてであり、どんな愛し方であろうとジムを愛しているに違いない。エラは精神を冒され始め、正常な判断は

3) マーガレットは仮面をはずした夫ダイオンに恐れおののき、ダイオンは仕方なく再び仮面をつける。彼女もまた真実のダイオンを認めることができなかった。

できない。"When mother and sister depart, however, and Ella no longer feels threatened, she can allow Jim to become her 'equal' again. She can even encourage him but remind him subtly of who and what he is" (Shaughnessy, 90-91). 二人だけになった時、エラの恐怖は消えジムの素直に受け入れることができる。"Where did I-? I was having a nightmare - Where did they go - I mean, how did I get here? (*with sudden terrified pleading-like a little girl*) Oh, Jim - don't ever leave me alone! I have such terrible dreams, Jim - promise you'll never go away!" (310) ジムに優しく甘え語りかけるエラがいる一方で、ジムの破滅に追い込む鬼のようなエラが顔を出す。相反する感情が彼女の心の中で交錯する。"To be with Jim makes her conscious of a sole virtue: her whiteness" (Tuck 203). 常にエラはジムと一緒にいることで彼より優位な立場にある白人であることを自覚する。ジムの白い心は愛することはできてもジムの黒い肌は愛することができない。ジムは "Deep down in her people - not deep in her" (308). と否定する。エラの黒への拒絶は無意識に出てくるものであり、嫌悪感には Peter. J. Gillett が言う "her unconscious hatred of his blackness" (Gillett 46) である。ジムではなく「黒」への憎しみである。しかし、ジム＝黒である。この矛盾にエラ自身どうすることもできず悩み苦しむ。やがて精神病を発症した危険な女性へと変貌していく。

弁護士になることでジム一人が白人社会に入っていくことをエラは許せない。そのためにはジムの破滅させても構わない。ジムの死をもってしても弁護士にさせることはできない。"she may develop a violent mania,

dangerous for you" (308) とハティ (Hattie) は看病と勉強で疲れきったジムに、エラを療養所に入れることを必死に説得するが、ジムは "I'm all she's got in the world!" (306) と断り、離れることはできない。二人の仲を引き裂こうとしているとしてハティに逆上し、追い返してしまう。そんな中、エラは寝間着の上に赤いガウンを羽織り、素足のまま右手に肉切り包丁を持って、殺人鬼のような目つきでじっと見据え、そっとジムの背後に忍び寄る。世間からの視線に恐怖を抱き続け、正常さをなくし、狂気さえ感じさせるエラだが、ジムなしでは生きられず、助けを求める。お互いに傷つけ合いながらも別れることはできない。二人は互いに苦しみ葛藤するが、その苦しみ葛藤を乗り越えることはできず、二人は精神的病に冒されていく。

結婚前のジムの苦しみは、白人への劣等感、人間的な弱さを持った自分との闘いであった。しかしエラとの結婚によって白人への劣等感さらには増した。黒人であるジムとの結婚によって、白人であるエラもまた白人への劣等感を持つことになった。互いに苦しみ、その苦しみを解決すべくジムは弁護士への道を目指す。しかしエラの苦しみをいっそう深くする。しかしジムはそれに気づかず、空回りし、精神的にエラを追い込む事になる。ジムが努力すればするほど、反比例的に、エラは悪魔のように狂暴さを持った女性へと変貌していく。弁護士試験に懸命に努力するジムに死を持ってしても邪魔をするエラ。心の中で葛藤しながらもそんなエラを責めることもできず、互いに離れることもできず、エラと共に次第に死への旅路へと向かっていくジムであった。

## 4

心に傷を負いアメリカに帰国したエラを出迎えたのはコンゴの仮面であった。エラの病の根源はジムが黒人であるという事実でもあるが、その黒人民族の象徴として、姉が結婚のお祝いに贈った仮面にもある。エラはコンゴの仮面に敵意をむき出しにする。

ELLA— (*defiantly aggressive*) No. I want it here where I can give it the laugh! (*She sets it there again - then turns suddenly on Hattie with aggressive determination.*) Jim's not going to take any more examinations! I won't let him!

HATTIE— (*bursting forth*) Jim! Do you hear that? There's white justice!— their fear for their superiority!— (303)

「弁護士の試験を受けさせない」と叫ぶエラと、姉ハティとの挑戦的なやり取りにジムは居た堪れなくなり、椅子に崩れるように座り両手で頭を抱える。しかしエラもまた心の重荷から逃れようと必死に闘っている。エラの心に仮面は大きくのしかかる。

姉ハティにとっては芸術的価値のある仮面も、エラにとっては醜悪で、まさに悪魔である。仮面はエラの心を逆なでするかのようになり、ジムのアイデンティティを、つまり黒人であることを再確認させる。毎日、いやと言うほど、ジムが黒人であることを思い知らされ、またその事実を避けたくても避けられない。エラはジムが黒人であることへの嫌悪、憎しみをさらに増長させ、増長させることでエラの心は狂気へと化していく。周り全てが黒人であり、全ての物が、世界が、黒人である。エラはそこから逃れることはできない。仮面

は部屋一面に魔性の雰囲気を漂わせ、二人の新居を圧するかのように、またエラの心をも圧するかのように怪しげな靈感を漂わす。エラは必死に抵抗する。

ラスト・シーンでは、エラは肉切り包丁を手に登場する。エラはさらにやせ衰え、両眼は狂気に燃え、仮面に向かってあらん限りの暴言を吐く。

ELLA—I'll give you the laugh, wait and see! (*then in a confidential tone*) He thought I was asleep! He called, Ella, Ella - but I kept my eyes shut, I pretended to snore. I fooled him good. (*She gives a little hoarse laugh.*) This . . . . . Jim! (*then in a terrified whimper*) Maybe he's passed! Maybe he's passed! (*in a frenzy*) No! No! He can't! I'd kill him! I'd kill myself! (*threatening the Congo mask*) It's you who're to blame for this! Yes, you! Oh, I'm on to you! (*then appealingly*) But why d'you want to do this to us? What have I ever done wrong to you? What have you got against me? I married you, didn't I? Why don't you let Jim alone? Why don't you let him be happy as he is - with me? Why don't you let me be happy? He's white, isn't he - the whitest man that ever lived? Where do you come in to interfere? Black! Black! Black as dirt! You've poisoned me! I can't wash myself clean! Oh, I hate you! I hate you! Why don't you let Jim and I be happy? ... (312)

"I married you" (312) が意味するのは、

コンゴの仮面が黒人を表象し、黒人であるジムと結婚したことは、コンゴの仮面と結婚したことであり、黒人として生きていくことである。ジム一人が白人社会に入っていくことは許せない。打ちひしがれて弁護士資格委員会からの手紙を持ってやってくるジムに結果を聞き、エラは歓喜きわまって叫ぶ。"It's dead. The devil's dead. See! It couldn't live - unless you passed. If you'd passed it would have lived in you. Then I'd have had to kill you, Jim, don't you see?-or it would have killed me. But now I've killed it.... So you needn't ever be afraid any more, Jim" (314). ジムが合格したらジムの中で生きる。そうなったらジムを殺さなくてはいけない。仮面はまさに黒人の心であり、ジムそのものである。Frederic I. Carpenter は次のように述べている。"Symbolically, she 'strikes through the mask' to destroy the dark, inner self of her Negro husband, and thus precipitates the tragedy" (Carpenter 105). また、Gillett もコンゴの仮面について次のような分析をする。

The Congo mask, then, appears to connote—or to have connoted for O'Neill—many things. Obviously, in its setting, it suggests something about the racial past of the Harris family—or the twentieth-century American conception of that past, it makes no difference which. Hattie, defiantly proud of her African heritage, regards the mask as "beautiful" and perhaps also as embodying "a true religious spirit." She stresses its value as a work of art and the "reality" of its creator as an artist. (Gillett 50)

コンゴの仮面は黒人の象徴であり、ハリス家の黒人としての歴史を物語るものでもあろう。姉のハティにとっては、ミケランジェロにも負けないぐらいの芸術作品であり、宗教的儀式には欠かせない面である。しかし、エラにとってコンゴの仮面は不気味な悪魔である。ジムが合格できないように、包丁を持ち歩き、ジムを怖がらせ勉強の邪魔だけでなく睡眠すら取れないようにジムを精神的にも肉体的にも追い込み破滅させていく。ジムはすべてを諦め、ただエラのためにだけ生き、自分の命をも捧げる決心をし、エラの望むように、またエラが心穏やかに一番幸せを感じることで幼い頃のジムとエラに戻っていく。幼い頃のジムに戻るだけでなく、エラに結婚を申し込んだ時に約束したとおり、奴隷として、愛されなくても良い、何も求めない、ただ忠犬のように足元に横たわり、盾となり命をかけて守る奴隷 "black slave" (294) として、ジム爺やのような存在にまで身を落としていく。

このラスト・シーンは、『奇妙な幕間狂言』のラスト・シーンを思い出させる。ニーナ (Nina Leeds) もまた最後、子供の頃に戻り、父親のようにマーズデン (Charles Marsden) に甘える。ニーナは夫、愛人、父なき後は父親的存在の男という三人の男に愛されたが、夫には死なれ、愛人とは別れ、最後父親的存在のマーズデンと共に余生を送ることになる。それは肉体的な死ではないが、これからの生活は死と同然の生気のない花も咲かない、ただ枯れていくのを待つのかのような生活である。マーズデンはジムと同様純情だが臆病な所があり、父親のような愛情を持ってニーナを庇護監視し、"I've wanted you so!" (671)<sup>4)</sup> "there's only you" (671) と、ニーナに優しく甘えられるのを心待ちにするような男で

ある。ジムもまたエラへの愛は "I don't want nothing-only to wait-to know you like me-to be near you-to keep harm away-to make up for the past-to never let you suffer any more-to serve you-to lie at your feet like a dog that loves you" (294) と申し出、ただひたすら尽くし、マーズデンと同じようにエラを庇護する。ジムもマーズデンも、エラやニーナにとって、最後は夫というより子供のように甘えられる、すべてを許し優しく受け入れてくれるジム爺やであり、父親のような存在になっていたのである。

## 5

エラの破壊性を中心に検証してきたが、次に、エラの破壊性の原因はどこにあるのかについて考察してみる。

何も知らない無邪気な幼い頃には問題はなかった。エラは成長とともに白人社会の中で黒人に対する偏見を募らせていく。つまり白人は常に黒人よりも優位な立場にいて、黒人は常に白人よりも劣位な立場にいないとてはならない。白人たちが先祖から受け継いできたごく自然なことであり、エラが、自分はジムより優位な立場にいるのだと、錯覚してしまうのも当然な事である。Floyd の言う "the prevailing sickness" を持った社会から、エラは、他の白人と同様、ある種の負の遺産を受け継いでしまった。ジムとの結婚によってエラは優位な所から劣位な所に落ちていくことになる。そんな屈辱にエラは耐えられず、ジムより優位な所に常に自分を置くことで、自分を慰める。そのためには、ジムの命を奪ってでも、その位置を維持していかななくてはならない。このエラの破壊性の最大の原因は病

4) テキストは *Strange Interlude*, in ed., *Complete Plays 1920-1931* (New York: Literary Classics of the United States, 1988.) を使用した。引用はすべてこの版による。

的な性格にある。祝福されない結婚によって二人はフランスへ逃げ出し、真実夫婦となつてからエラは同じ白人の視線に異常なまでの恐怖と意識を持ち始め、家の中に閉じこもるようになり、結果的にアメリカに戻ることになる。

この異常とも言えるエラの性格的な意識過剰は、精神的な病を発症する一つの要因となる。ジムが傍にいないと恐怖に駆られ、青ざめ、ものに取り憑かれたかのように避難所としてのジムの元に駆け寄り、母ハリス夫人（Mrs. Harris）、姉ハティに敵意の目を向ける。かつての仲間であるショーティにさえ身を隠すように窓から離れ、蹲る。ただ、ショーティが気づかなかっただけであつて、エラを避けていたわけでもない。恐怖と強迫観念でエラは次第に押しつぶされていく。そして、追い討ちをかけるかのようにエラを待ち受けていたものは、黒人の象徴であるコンゴの仮面であつた。闘わなくてはいけないもう一つの敵が現れた。このコンゴの仮面は、二人の新居を我がもの顔に押し、魔性の雰囲気強烈に醸し出す。コンゴの仮面の存在がいっそうエラの心を追い詰め、狂気さえ感じさせる程に、心の葛藤は深みに嵌っていく。しかし、エラには最初から、その苦しみや葛藤をジムと二人で解決しようとする一筋の努力さえうかがえない。エラの性格にも大きな問題はあ

る。眠らせないようにし、勉強をできないように、精神的にも肉体的にもジムを追い込む。包丁を持ち、気が触れるかのようにジムの前に現れ、怖がらせ、あらゆる手段をもってジムの弁護士試験合格を阻止し、次第にジムを破滅へと導いていく。しかし、エラの破壊性だけを非難することに問題はないだろうか。エラだけの問題ではなく、ジム自身の人間の弱さがエラを破壊的女性へと導いていった一

つの要因であると考えられる。Thierry Dubost は、次のように指摘する。"They do not manage to find harmony, for psychologically they are not pure. The causes of the failure of their marriage are twofold: For Ella, the weight of the past takes the form of a subconscious racism, and for Jim, an inferiority complex makes him aspire to a metamorphosis, which will be a real denial of his personality" (Dubost 102). Edward L. Shaughnessy もまたジムに原因があることを指摘する。"He lacks nothing in endowment—neither intelligence nor integrity, but he suffers a debilitating lack of self-esteem. To vindicate and fulfill his need to serve, Jim will place himself in a kind of bondage to Ella Downey. He tells her he is ready 'to become your slave!... Jim has given Ella a kind of power that, when the virus breaks out in her, will further demean him.'" (Shaughnessy 89) ジムは、自分が黒人であることを嫌う。そのため白墨と水を飲んで白くなろうとする。また、エラへの愛は奴隷のように膝まずき、服従し、自分の意思は持たないまさに奴隷である。そんなジムの態度が更にエラを増長させていく。母親であるからこそジムの母はこの二人の弱さを知っている。母は言う。"Strong? Dey ain't many strong" (299). ジムに、姉ハティのような、人間としてのプライドを持った意志の強さと、真実に立ち向かう勇気があったら、精神的にエラを支えることができたであろうし、エラの破壊性は生まれなかったかも知れない。

エラを非難するハティをジムの母が諭すように語った言葉、"Don't you forget dat it was hard for her—mighty, mighty hard—harder for de white dan for de black!"

(298) は、冷静かつ客観的な意見であり、エラにとって救いともなる真実の母のような愛情あることばであり、自分たちの置かれている状況、社会を十分に理解した言葉である。この劇にはエラの母は登場しない。"You made up wit yer family?" (290). ショーティがエラに語る台詞だが、エラは、母だけでなくすべての家族と絶縁状態である。エラにも、ジムのように優しい愛情ある良き理解者である母がいたら、どのように変わっていたであろう。たとえ社会的に非難されようと支えてくれる母がいたら、これ程までに精神的に追い詰められることはなかったであろう。一方のハティには、家族の要となる良き理解者である母が、またエラの苦しみにも理解を示す素晴らしい母が常に傍にいる。ハティの "Yes, if they'd only leave us alone!" (298) に対し、母は、"Dey leaves your Pa alone. He comes to de top till he's got his own business, lots o' money in de bank, he owns a building even befo' he die...." (298) と、娘の間違いを諭し、冷静に言い聞かす。だからハティは人間としてのプライドを持ち、真実を直視し、自信を持って社会に立ち向かっていける。娘にとって一番の味方であり、その頼りとなる母が、エラにはいない。唯一頼れるのは黒人であるジムだけである。母親の不在は、家庭を揺るがすものであり、時に家庭崩壊に至る。母親の存在の重要性について Dubost は、次のような興味ある見解を示す。"In most of the situations in which a mother and a daughter are staged together, harmony prevails, for both generations are credited with the same characteristics, principally motherly solicitude, and an ability to understand the other person, which are the basic elements of the family's stability" (Dubost 60).

オニールにとって母親の存在は大きな影響を持っていることは、最初に指摘したが、作品の中でも母親の存在は大きな役割を果たしている。『奇妙な幕間狂言』の主人公ニーナは、すでに母を亡くし、父と二人暮らしである。財産も何もない男との結婚に反対する父は、ニーナに内緒でこれから出征するフィアンセのゴードン(Gordon)に、"such a precipitate marriage would be unfair to Nina, and scarcely honorable on his part" (640) と言って、結婚を延期させる。そしてゴードンは戦死する。そんな卑劣な父の行為にニーナは、憎しみさえ持っているような行為で父を責め、家を出て行く。どんな父親にとっても娘は離したくないものである。しかし妻が生きていたら、きっとこのような卑劣な行為に出ることはなかったであろうし、恐らく、少なからず、妻の説得によって出来なかったであろう。"for both generations are credited with the same characteristics, principally motherly solicitude, and an ability to understand the other person ...." と Dubost が分析するように、母親は、ニーナのゴードンへの愛を理解できたであろう。たとえゴードンの戦死という悲しい結果が起こっても後悔することはなかったかもしれない。また最悪のニーナの家出という行為は止めることが出来たかもしれない。父は娘のそんな行為を止める術もなく、"wife! ... helpmeet! ... now I need help! ... no use! ... she's gone!" (638) "oh, wife, why did you die, you would have talked to her, she would have listened to you!" (645) と嘆く。

『喪服の似合うエレクトラ』の主人公ラヴィニア(Lavinia)には母クリスティン(Christine)はいるが、クリスティンにとっては、ラヴィニアは憎しみの子であって愛することのできない娘である。ラヴィニアにとっ

でもクリスティンを母として尊敬し愛することができない。同じ女性として許すことのできない、また同じ男性を愛したばかりに、いっそう憎しみを募らせるラヴィニアであった。この二人にとっては、同じ女性であったからこそ、考えることや感情が互いに察することができた。それだけに、さらなる憎しみや敵意が生まれる。クリスティンには母として娘への愛情はなく、一方、母から愛情をかけて貰えないためラヴィニアもまた母を愛することはできない。ラヴィニアには母がいないのも同じである。

ニーナもラヴィニアもエラのように心に問題を抱えた女性たちである。姉のハティはこれら三人の女性たちとは異なって、心身ともに健康的で、立派に社会の中で生きている女性である。ハティには家族の要となる良き理解者である素晴らしい母が常に傍にいる。だからこそハティは、人間としてプライドを持って、社会に立ち向かっていける。一方のエラは、家族とは絶縁状態で、精神的な支えとなる母はいない。このように、母親の存在は娘にとって大きな支えとなり、家族の要となる大切な役割がある。エラに、ジムと別れた後、戻る家が、暖かく包んでくれる母がいたら、こんなにも苦しみ、精神的に壊れていくことはなかったであろう。エラには、戻る場所はなく、ジムしかいないのである。母親の不在もまたエラを病的破壊性へ導いていった原因の一つとして考えてよいだろう。

### おわりに

エラの破壊性の最大の原因はエラの病的性格に起因するところが大きい。一方、夫であるジムにもまた原因の一端はある。ジムの母が言う "Don't you forget dat it was hard for her - mighty, mighty hard-harder for de white dan for de black!" (298) の言葉が

ジムには届かない。ジムは白人への極度の劣等感に苦しみ、押し粒されそうになり、エラを支えることができない。ジムのエラへの愛は「奴隷」としてエラに仕えるだけのことである。それは、エラの苦しみ、葛藤を取り除くのではなく、反対にジムは黒人であることを知らしめ、黒人であることへの憎しみを募らせるばかりであった。ジムの人間的弱さもまたエラの破壊性を増長させていったことには間違いない。

Judith E. Barlowは "These early denizens of O'Neill's world look forward to more fully developed female destroyers like Ella Harris in *All God's Chillun Got Wings* (1923), who celebrates her husband Jim's failure to pass the bar examination; ..." (Barlow 165). と述べているが、エラは、オニールの作品の中でも、「破壊性」の激しさにおいて、抜きん出ている。陰湿的な激しさや強さにおいては、エラの破壊性はクリスティンより勝っていると言える。

また、病的性格を精神的病へと発症させたもう一つの要因として母親の不在を上げることができるであろう。エラに、ハティの母のように、優しく、愛情深く支えてくれる、また諭してくれる母が傍にいたら、エラは精神的病を発症することなく、救われたかもしれない。ジムもまた、救われたであろう。

### Works Cited

- Barlow, Judith E. "O'Neill's Female Characters." Michael Manheim ed., *The Cambridge Companion to Eugene O'Neill* (Cambridge: Cambridge U. P., 1998): 164-177.
- Carpenter, Frederic I. *Eugene O'Neill*. (New York: Twayne Publishers, 1964)
- Dubost, Thierry. *Struggle, Defeat or Rebirth: Eugene O'Neill's Vision of Humanity* (Jefferson, North Carolina: McFarland & Company,

1997)

Eliot, T.S. "All God's Chillun Got Wings." Oscar Cargill, N. Bryllion Fagin, and William J. Fisher ed., *O'Neill and His Plays* (New York: New York U. P., 1961): 168-169.

Floyd, Virginia. *The Plays of Eugene O'Neill: A New Assessment*. (New York: Frederick Unger Publishing, 1985.)

Gillett, Peter J. "O'Neill and the Racial Myths." Ernest G. Griffin ed., *Eugene O'Neill: a Collection of Criticism* (New York: McGraw-Hill, 1976): 45-58.

Shaughnessy, Edward L. *Down The Nights And Down The Days: Eugene O'Neill's Catholic Sensibility*. (Indiana: U. of Notre Dame P., 2000)

田川弘雄・鈴木周二(編著). 『アメリカ演劇の世界』. (研究社, 1991) : 75-125.

Tuck, Susan. "The O'Neill - Faulkner Connection." James J. Martine, *Critical Essays on Eugene O'Neill* (Boston: G. K. Hall, 1984): 196-206.